

西国三十三度満願供養塔

(船坂地区)

船坂集落の中央に位置する弁財寺には、高さが2mを超える背の高い塔が2基あります。塔の種類は宝篋印塔という供養塔ですが、正面に刻まれた文字には「西国三十三度満願供養塔」とあることから、西国三十三所の巡礼に関係のある塔ということが分かります。

西国三十三所は、約1300年の歴史を持つ日本最古の巡礼路とされるものです。奈良時代に長谷寺（奈良県桜井市）を開いた徳道上人は、仮死状態に陥った際に地獄で閻魔大王から観音巡礼の功德を広めるようにお告げを受け、起請文（神仏との誓約書）と33の宝印を授かりました。徳道上人が人々を救うために極楽往生の通行証となる宝印を配って定めたのが、西国三十三所の観音霊場だと伝わります。

西国三十三所の巡礼は那智山青岸渡寺から始まり、第33番札所までの総距離は約1000kmにも及びます。江戸時代の記録には、すべての札所を歩いて巡るのに1カ月以上を要したと記されています。最近では西国三十三所の観音霊場巡りがブームとなっており、交通網の発達に

よって手軽に巡礼できる時代になりましたが、かつては他の行者にお願いをして巡礼をもらうことが行われていました。このような職業的巡礼者は三十三度行者などと呼ばれ、西国三十三所を三十三度巡ること

で満願しました。弁財寺に建つ2基の塔は、その満願を記念して建てられたものです。塔が建てられたのは明治31年（1898年）と大正12年（1923年）で、成川誠心、刀祢秀林がそれぞれ満願を成し遂げた行者として名が刻まれています。また、基壇には、世話人や寄付者など多くの名前が刻まれています。明治時代以降には満願供養が減少し、供養塔の数も減少傾向にあると考えられています。この2基の塔は大業を成し遂げた証しとして存在しています。



西国三十三度満願供養塔 【高さ】左：2.6 m 右：2.4 m